

研究ノート

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿―第六帖(7) 菰・花勝見・葦・菱―

福田 智子

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌もある。本稿では、「菰」から「菱」までの題に配されている出典未詳歌、十首について注釈を施す。

凡例

- 一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、考証の結果、出典の見出せなかつた歌について注釈を加えるものである。本稿では十首を収めた。
- 二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を()を付して記す。
- 三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。
- 四、本文は、歴史的仮名遣いに統一する。踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を()に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「」を付す。ただし、漢字仮名の区別は底本のままとする。

五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
- 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)
- 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
- 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(羅)
- 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
- 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
- 田林義信氏旧蔵本 略称(田)
- ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)
- 寛文九年版本 略称(寛)

なお、諸本本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き

資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

(永) 細川家永青文庫叢刊3『古今和詞六帖(下)』(汲古書院、昭和五十八年一月)所収の影印

(松) 島原図書館蔵肥前島原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料
(寛) 架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称(『新編国歌大観』の目次に拠る)、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書)とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

八、巻末には、菰々菱題の歌(三八〇七〜三八二五番)の別出歌一覧を付す。

注釈

三八〇八(こも)

【本文】

はる(わ)こまのあさるさはべのまこもぐさまことにわれをおもふやはきみ

【校異】 ○まこもぐさ—まこも草(松)

【語釈】 ○はるこま 春、若草を求めて野に遊ぶ馬。

○あさる 餌を

探し求める。 ○まこもぐさ イネ科の大形多年草。真菰。菰。水辺に生える。ここまでが序詞。同音反復で「まことに」を導く。 ○おもふやは 思っているのか、いや、思っていないはしないだろう。「やは」は反語。 ○きみ あなた。ここでは男性。

【通釈】

春駒が沢辺に生える真菰草を餌に探し求めるように、本心から私を思っているのか、いや、思っていないはしないだろう、あなたは。

【他出】 なし

【考察】

上句は有意の序詞で、春駒が沢辺に生えた真菰草を一心に探し求める情景に、男性が一途な恋心を抱き女性を求めるさまを重ね、さらに、「まこもぐさ」から同音の「まことに」を導くことにより、男性の女性への思いが本心ではないのかと、強く問い質した女性の歌である。

「はるこま」の勅撰集における初出は『拾遺集』で、「ひきよせばただにはよらで春こまの綱引するぞなはたつときく」(雑賀・一一八五・平定文・題しらず)という歌がある。私家集にも、「霞たつ野をなつかしみ春駒のあれも君がみえわたるかな」(小町集・六三)などの歌があり、春駒の気性の荒さが知られる。また、「わかくさの野辺におひたつはるごまはいづれのあきかひかんとすらん」(恵慶法師集・一六・はるののに、こまどもはみ侍る所)という屏風歌からは、春駒が草を食む情景が屏風の図柄としてある程度定着していたことがわかる。

春になって菰が芽を出すと、馬は好んで餌とする。その情景は、「のがひせしこまのはるよりあさりしにつきずもあるかなよどのまこももの」(好忠集・四四八)、「かくれぬもかひなかりけり春こまのあさればこも

のねだに残らず」(和泉式部集・七)といった百首歌中に詠まれる他、勅撰集にも、「まこも草つのぐみわたるさはべにはつながぬこまもはなれざりけり」(詞花集・春・一二二一・俊恵法師・春こまをよめる)といった例がある。

「まこもぐさ まこと……」と続く例は、『新編国歌大観』を検しても、「こまにやはまづしらすべきまこもぐさまこととおもふ人もこそあれ」(実方集・八二・おなじ女にやるふみを、こまの命婦にみせて、さりながらなき事を人人いふとききて)、「よどわたり雨にはいとどまこもぐさまことにそれをねになかれにし」(和泉式部集・五〇九・人のかへりごとに)、「まこもぐさまことにわれは思へどもさも浅ましきよどのさは水」(和泉式部集・七八三・おもへどもおもはず、とのみうらむる人に、和泉式部統集・二七七・第四句「なほあさましき」)、「まこもぐさまことに人のかりつめばのがひのこまもなつくとをしれ」(相模集・三四三・中夏)といった例を見出すのみである。これらの歌はすべて、当該歌の影響下に詠まれたものと推察されるが、和歌表現としては、それ以後も定着しなかったようである。

結句「おもふやはきみ」の用例は、「このはるをのぶるこころのはじめまでちよふるまではおもふやはきみ」(中務集・二一四・返事、書陵部本中務集・一九三・返し・第三・四句「はじめよりちよすぐるまで」)をかるうじて見出すのみである。和歌の用例が稀少であることを考え合わせると、強い語気のある口語性を読み取ることもできようか。

三八〇九(こも)

【本文】

わがきみが^(お)おゆるが^(い)をしさ^(い)さだのいけのこもにもがもやりあげは
やさん

【校異】○和歌本文―片仮名小書き(永・林) ○わかきみか―わか君か^(せこ)
(宮) 我せこか(黒) わかせこか(寛) ○おゆる^かやおし^さ―オユルヤオ
シサ(永) おゆる山也(松) おゆるやま也(羅・田) 出ゆかやお也(和)
オユルヤマ也(林) いてゆかやおなり^(おふるか)(宮) おふるか^(朱)をしき(黒) おふ
るかおし^さ(寛) ○、たのいけの―さ、たの池の(松・羅・田) さた
いけの(和) サ、タイケノ(林) さたいけの^(朱)(宮) ○こもにしかし^もや
―コモニモカモヤ(永) こもにもかりや(松・和) こもにもかもや(羅・田・
黒・寛) コモカモヤ^(二)(林) こもにもかり^もや(宮) ○あり^かあけ^はそやさん^(本ノマ)
―カリアケハヤサン(永) かりあけそやさん(松・羅・田) ありあけは
やさん(和・宮) アリアケソヤサン(林) 川あけはやさん(黒・寛)

【語釈】○わがきみ 私の主君。主人に対して親しみ敬っている。版本
系本文(黒川本・寛文九年版本)では「わがせこ」(女性が親しい男性
に対して呼びかける場合という)。○おゆる 動詞「老ゆ」(年齢が重
なる。年をとる。年寄る。)の連体形。○さだのいけ 河内国の地名「蹉
跎の池」。『新編国歌大観』によれば、和歌の用例は当該歌のみである。
「蹉跎」(盛りを過ぎて凋落の時節になること)を掛けるか。○こもに
もがもや 菰でもあればよいのになあ。「にもがもや」は、詠嘆を込
めた願望を表す。○かりあげはやさん 残らず刈り取って、ほめそや
そう。「刈り上ぐ」は、残らず刈り取るの意。「わがやどのわさだかりあ
げてかへすともきみがつかひはただにはやらじ」(家持集・二二九)。菰は、
編んで筵にし、また、粽を巻くなど、日常生活の中で加工して用いる。
「こもまくら」(二三八一〇番参照)もその一例。成長した菰は、生活用具

の材料として利用価値が高い。寛文九年版本は「川あけ」とするが、「川あげは刈あけの誤なるべし」(石塚龍磨稿、田林義信編『校證古今歌六帖』下、有精堂、昭和五十九年四月、三三二頁。)という指摘は妥当であろう。「はやす」は、ほめそやす意。「ん」は意志。「山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見はやさむ」(古今集・春上・五〇・よみ人しらず・題しらず)。

【通釈】

私のご主人さまが年をとるのは残念なことだ。(ご主人さまが)盛りを過ぎたという名の蹉跎の池に生える菰でもあればよいのになあ。そうしたら、残らず刈り取って、立派な菰だとほめそやそう。

【他出】

『古今和歌六帖』第三、一六六五番

いけ

我がせこがおゆるがをしささだのいけのたまもにもがなかりあげは
やさん

『夫木和歌抄』卷第二十三雑部五、一〇八二五番

さののいけ、上野又和泉

同(題しらず)、六帖

同(読人不知)

わがせこをおほゆるがをしさの池のこもにもがもやかりあげはや
さん

『夫木和歌抄』卷第二十三雑部五、一〇八三〇番

さたのいけ、未国

題しらず、六三

読人不知

わが君のおふるがをしささたの池のこももかくやかりあげはやさ

ん

『歌枕名寄』卷第十、三〇五二番

池

六帖

わがせこがおふるがをしささたの池のこもにもがもかりつつはや
さん

【考察】

菰の成長とは対照的に、自分の仕える主人が年老いていくのを惜しむ歌である。その点で、『校證古今歌六帖』上(石塚龍磨稿、田林義信編、有精堂、昭和五十九年四月、三三二頁)が指摘するように、『万葉集』の「天なるや月日のごとく我が思へる君が日に異に老ゆらく惜しも」(卷十三・三二六〇・三二四六)に通じるものがある。『万葉集』には他にも、「沼名川の底なる玉 求めて 得し玉かも 拾ひて 得し玉かも あたらしき 君が 老ゆらく惜しも」(卷十三・三三二六・三三二四七)という歌があり、当該歌は、これらの万葉歌の影響下に詠まれたものであろう。

「他出」に挙げるとおり、当該歌と酷似した歌が『古今六帖』第三、一六六五番に載る。「いけ」題の冒頭に載るこの歌は、第三句の「さたの池」に着目して配されていると見られる。一方、当該歌は、第四句に、「こもにもがもや」など、諸本「こも」を詠んでいることから、歌題「こも」に適う。ちなみに、一六六五番歌では、第四句は「たまもにもがな」など、諸本「たまも」を詠んでおり、この本文では当然、「こも」題には適さない。なお、当該歌の初句の「わがきみ」は、版本系本文では「わがせこ」になっている。これは、一六六五番歌において諸本共通する、

安定した初句の本文である。当該歌の版本系本文が、この一六六五番歌の初句本文を根拠として、「わがきみ」を「わがせこ」と改変し、「元来、主君と家臣との関わりについて詠んだ当該歌を、男女の関係に取り成した可能性を指摘し得る。

「さだのいけ」の和歌の用例は、今のところ他例を見ない。「ささだのいけ」の異文もあるが、これは、直前の第三句「おゆるやおしさ」の「おゆるやおし」の部分を「おゆるやま也」と誤読したために、最後の一文字「さ」を第四句「さだのいけ」の句頭に付けることになってしまったことによる誤写であろう。そもそもこの箇所は、「さ」文字が重なっており、第四句第一字にあたる、ふたつ目の「さ」に踊り字が使われやすかったことも、この誤りを助長したと考えられる。ちなみに、当該歌は、片仮名で小書きされた伝本も存するが、片仮名表記「オユルヤオシサ」が介在することにより、「ヤオシ」の部分が、字形の類似から「ヤマ也」と誤読されやすくなる。この片仮名小書きの影響によると見られる本文の乱れは、多くの伝本にわたって見受けられる。

「……にもがもや」という表現は、夙に『万葉集』に三首、「天飛ぶや鳥にもがもや都まで送りまをして飛び帰るもの」(巻五・八八〇・八七六・書殿にして饞酒する日の倭歌四首)、「父母も花にもがもや草枕旅は行くとも捧ごて行かむ」(巻二十・四三四九・四三二五・右の一首、佐野郡の丈部黒当)、「母刀自も玉にもがもや頂きてみづらの中にあへ巻かまくも」(巻二十・四四〇一・四三七七・右の一首、津守宿禰小黒栖)という歌が見える。勅撰集では、「かひがねをねこし山こし吹く風を人にもがもや事づてやらむ」(古今集・東歌・一〇九八・かひうた)が唯一の例である。また私家集では、「いもがぬるとこのあたりにいは

くぐる水にもがもやいりてねにこむ」(家持集・二九二)が、平安期の例としてかろうじて見出せる程度である。この句にも、万葉風の古めかしさが感じ取れよう。なお、後世、『明日香井集』に用例が見られるが、懐古的な用法と見られる。

三八一〇(こも)

【本文】

こままくらたかせのよどにかるこものかるともわれはしらでたのま
ん

【校異】 ○こままへら―こままくら(永) こも枕(松・和・羅・林・宮・黒・寛) 薦枕(田)

【語釈】 ○こままくら 枕詞。真菰を束ねて作った枕が高いことから、「高」を含む語「高瀬」に掛かる。また、水辺の旅寝を暗示する。○たかせのよど 川の浅瀬の、水が流れないで淀んでいるところ。具体的には、山城国の歌枕「淀」を想起させる。○かるこもの ここまでが序詞。菰を「刈る」の同音反復で「離(か)る」を導く。また、「借る」で「こままくら」の縁語。○しらで 関知しないで。「し(知)る」は、関わり合う、問題にするの意。

【通釈】

(菰枕を借りて旅寝をし)浅瀬の淀みで菰を「刈る」、そのように(恋人が私から)「離(か)る」(離れていく)ことがあっても、私は気にしないで、あの人を頼みにしよう。

【他出】なし

【考察】

恋人が他所で仮寝をすることを暗示する「こもまくら」のイメージのもと、「刈る」に「離る」を掛けるといふ常套的な掛詞を用いて、恋人が自分のもとから離れていくことを仮定し、それでも恋人を頼りにしようという女性の歌である。

「こもまくら」は、『常陸風土記』多珂郡の条に「風俗の説に、薦枕多珂の国」とあり、『日本書紀』にも「伊須能箇瀨 賦屢鳴須擬底こもまくら 拳慕摩矩羅 柁箇播志須擬……」(巻十六・九四・影媛)と見えるなど、古くは「高(たか)」に付く枕詞として用いられていた。当該歌は、これらの表現の系譜に連なると言えよう。だが、『万葉集』では、「薦枕相まきし児もあらばこそ夜のふくらくも我が惜しみせめ」(巻七・一四一八・二四一四)とあり、平安中期の例でも、「心だにゆきはてぬればこも枕淀のわたりは近づきぬらん」(公任集・五二一・うちよりかへり給へる)、「いそなれて心もとけぬこもまくらいたくなかけそきしの白浪」(定頼集・四八・ちくぶじまにまうでたりけるに)の他、『伊勢大輔集』の贈答歌、「こもまくらかりのたびねにあかさばやいりえのあしの一よばかりも」(一四二・返し、みちにひきいれてみしに、そのさまをかしかりければ)、「こもまくらかりそめにもあかさなむながくもあらずなつのしののめ」(一四三・かへし)といったように、薦枕そのものを詠み、「高(たか)」に付く例は見当たらない。「たかせのよど」の勅撰集における初出は、『続後撰集』を待たねばならない。勅撰集以外の歌集に視野を広げても、当該歌はごく初期の例である。その後は「いかにしてまこもからん五月雨にたかせのよどの水まさりける」(堀河百首・四四一・師時・五月雨)、「まこも草たかせのよどにしげれども末葉もみえず五月雨の比」(久安百首・一〇二九・待

賢門院堀川・夏十首)といった歌があるが、菰とともに詠まれることが多い。なお、平安末期以降、「たかせのよど」の「こもまくら」が詠まれた歌が見受けられるようになるが、当該歌の影響と考えられよう。

三八一二(こも)

【本文】

こまぢがふさは(わ)のわかごもかり(こ)にきていかでよどの(こ)の(こ)ことをしりけん(つらゆき)

【校異】

○こまぢかふ(に朱)こまぢかふ(宮) 駒にかふ(黒・寛) ○わかごもかり(墨)にきて(墨)若蔭をかり(墨)にきて(松・羅) 若薦あり(言かきみに)にきて(林) 若蔭(墨)からん(墨)にきて(宮) ○よとの(墨)よとの(宮) ○ことをしりけん(墨)かをと(墨)知せん(和) (こ朱)か(り朱)とをしらせん(宮)

【語釈】

○こまぢがふ 馬があちこちに行き来する。「ちがふ」は、多くのものがあちこちに交錯する意。○わかごも 若くしなやかな、芽を出したばかりの菰。○かりにきて 「かり」は「刈り」と「仮」との掛詞。

○(若菰を)刈りに来て」と「仮初めにやって来て」の意を掛ける。○よどの 「淀野」(山城国の淀付近の野)と「夜殿」(寝所・寝室)との掛詞。

【通釈】

馬があちこちに行き来する沢に生える若菰を刈りに来て、どうしてそこが淀野だとわかったのだろうか(仮初めに来ておいて、どうして寝所の場所がわかったのだろうか)。

【他出】

なし

【考察】

春になって菰が芽吹いた沢では、駒があちらこちらを歩き来しながら菰を食んでいる。そこに菰を刈りに来た男性は、そこが菰の名所、淀野であることをどうして知ったのだろうか、といぶかしむと同時に、「かり」(刈り・仮)と「よどの」(淀野・夜殿)というふたつの掛詞を用いることにより、仮初めにやって来ただけなのに、どうしてその男性は女性の寝所を知っているのだろう、という意を重ねた歌である。「こま」は男性、「わかごも」は女性の寓意を読み取ることもできようか。なお、結句の異文「かどをしらせん」に拠れば、「かど」は「門」で、下句は、仮初めに来た人には寝所の出入り口は決して知らせまい、の意となる。

「わかごも」は、夙に『万葉集』に「……馬並めて み狩立たせる 若薦を 狛路の小野に 鹿こそば い這ひ拝め 鶉こそ い這ひもとほれ……」(巻三・二四〇・二三九・長皇子、狛路の池に出でます時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首)という例がある。「わかごも」を「刈る」ことから、この万葉歌では、「わかごも」は、地名「狛路」に付く枕詞である。勅撰集においては、『古今集』の「山しろのよどのわかごも かりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき」(恋五・七五九・よみ人しらず・題しらず)という歌が初出である。「刈り」に「仮」を掛け、「(仮に)来」と続く修辭は、当該歌の先蹤と見られる。八代集では、他に「山しろのよどのわかごもかりにきて袖ぬれぬとはかこたざらん」(新古今集・恋三・二二二・八・重之・題しらず)を見出すに過ぎない。私家集には、『好忠集』に二首、「かはづなくゐでのわかごもかりほすつかねもあへずみだれてぞふる」(一一八・四月をはり)、「見たせばよどのわかごもか
らなくにねながらはるをしりにけらしも」(四八九・春十)という歌が

あるが、前者は好忠の〈毎月集〉(三百六十首和歌)、後者は〈順百首〉の中の歌である。前掲『新古今集』の重之歌をあわせると、平安時代においては、十世紀後半に活躍した歌人の歌に用例が見出されることに注意される。

第三句「かりにきて」の「かり」は、掛詞として用いるのが常套である。「おはらぎのもりのくさとやなりにけんかりにきてとふ人のなきみは」(忠岑集・六四・いとまにはべりけるころ、人のとはずはべりければ)は、当該歌同様、「刈り」と「仮」とを掛ける。

淀の菰は、勅撰集においては『古今集』から詠まれ、「まこもかるよどのさは水雨ふればつねよりことにまさるわがこひ」(恋二・五八七・つらゆき・題しらず)、「山しろのよどのわかごもかりにだにこぬ人たのむ我ぞはかなき」(恋五・七五九・よみ人しらず・題しらず)の二首の歌が見える。また私家集にも、「五月待つほどにさはみづまさりつつよどのまこもおひにけるかな」(元真集・一七八・三宮にこちまきたてまつるとて)、「よどののまこものなをかきわけてかる人なしにこひしきやなぞ」(千穎集・五八・こひ十二首)などがある他、「まこもぐさかるとはよどのさはなれやねをとどむてふさははそことか」(蜻蛉日記・上・三五・本つひと〈時姫〉)、「水まさるよどのまこものおひの世にふかく物思ふ春にも有るかな」(宇津保物語・かすがまうで・一六八・平中納言殿〈正明〉)といった散文作品中の和歌にも用例を見出すことができる。「よどの」の勅撰集における初出は『後撰集』で、「おく霜の暁おきをおもはずは君がよどのによがれせましや」(恋五・九一四・よみ人しらず・しのびてまできける人の、しものいたくふりける夜まからで、つとめてつかはしける)であるが、「夜殿」の「の」に「野」を掛けるにとどまる。

当該歌のように、「淀野」と「夜殿」とを掛ける例は、『拾遺集』の「し
げることまこものおふるよどのにはつゆのやどりを人ぞかりける」(夏・
一一四・壬生忠見・天曆御時御屏風に、よどのわたりする人かける所に)
を待たねばならない。

三八一三(こも)

【本文】

みくまの(こ)のかるやみこものあみかけてゆふてにおもふ我ならなくに

【校異】なし

【語釈】○みくまの 熊野のこと。紀伊半島の南部、熊野川流域と熊野
灘に面する一帯の地域。○みこも 水中に生える真菰。熊野の菰が和
歌に詠まれるのはきわめて稀である。「みくまの」から「み」の同音反
復で導かれたか。○あみかけて 「あみ」は「網」と「編み」とを重
ねる。○ゆふて 繕い縫う手間。

【通釈】

御熊野で刈った御菰を編んだ網を張り渡して、繕い縫うのかかる
手間が多いように、多くの女性の中のひとりといった程度に、あな
たを恋い慕っている私ではないのに。

【他出】

『夫木和歌抄』巻第二十二雑部四、九八二〇番

みくまの、紀伊

こも、六六

読人しらず

みくまの(こ)のかるやみこものあみかけてゆふてに思ふ君ならなくに

『歌枕名寄』巻第十八、四七八八番

(真熊野)

真熊野にかるやみこものあみかけてゆふてには如本おもふ我ならなくに

【考察】

「みくまののかるやみこものあみかけてゆふてにおもふ」という
表現が遇する内容が解しにくい。『万葉集』に「曇み薦隔て編む数
通はさば道の芝草生ひざらましを」(巻十一・二七八七・二七七七)、
「逢ふよしの出で来るまでは曇み薦隔て編む数夢にし見えむ」(巻
十二・三〇〇八・二九九五)とある例が、「曇み薦」(菰で作った敷物、あ
るいは敷物にする菰)の「隔て」編む数」の多さを詠んでいることか
ら推すと、当該歌の「みこものあみかけてゆふて」も、数の多さを表現
するか。なお、後世の『俊忠集』にも載る『堀河院艶書合』の歌、「み
しま江のかりそめにさへまこもぐさゆふ手にあまるこひもするかな」(新
勅撰集・恋四・八九五・権中納言俊忠・おなじ艶書とてよみ侍りける)は、
当該歌を踏まえている。

「くまの」の「こも」を詠んだ例は、『新編国歌大観』を検する限り、
他例を見ない。「みくまの」と言えば、「みくまのうら」の「はまゆふ」
が詠まれるのが常套である。当該歌を念頭に詠んだと見られる、後世の
『新撰六帖』の「かりてほすよどのまこもあみ糸のちがひめおほきわ
がうれへかな」(第六・二〇一九・信実・こも)という歌も、地名を淀に
変更している。

三八一四(こも)

【本文】

さつきまつぬま(を)におひたるわか(こ)ものそよそ(こ)よわれもいかでとぞ思ふ

【校異】 なし

【語釈】 ○わかこも 三八二二番歌参照。当該歌では、若い女性の比喩か(【考察】参照)。 ○そよそよ 副詞「そよ」を重ねた語で、風に草木がそよぐ音を表す。また、感動詞「そよ」を重ねた語、それだ、それだの意を掛ける。 ○いかで 何とかして。

【通釈】

五月を待つ沼に生えた若菰がそよそよと風になびいて音をたてるように、それぞれ、そのことですよ。私も何とかして(恋人に逢いたい)と思う。

【他出】

『和歌童蒙抄』第七草部、六二四番

(蔣)

さつきまつぬまにおひたるわかこものそよそよわれもいかでとぞおもふ

【考察】

若菰が風になびいて立てる音、「そよそよ」に掛けて、まさにその恋人に逢うことを切に願う、男性の歌であろう。

初句に「さつきまつ」という句を置く歌は、「さ月まつ山郭公うちはぶき今もなかなむこそふるごゑ」(古今集・夏・一三七・よみ人しらず・題しらず)、「さつきまつ花橋のかをかげば昔の人の袖のかぞする」(古今集・夏・一三九・よみ人しらず・題しらず)が著名であり、「山郭公」や「花橋」を詠んだ例が印象的である。一方、平安中期の私家集には、菰が生長するさまも、「五月待つほどにさはみづまさりつつよどのまこももおひにけるかな」(元真集・一七八・三宮にこちまきたてまつる

とて)と詠まれており、陰暦五月の情景のひとつとして捉えることができるが、用例は稀である。

「さつき」の「こも」は、「心ざしふかきみぎはにかるこもはちとせのさ月いつかわすれん」(拾遺集・雑賀・一一七二・春宮大夫道綱母・五月五日、ちひさきかざりちまきを山すげのこにいれて、ためまきの朝臣のむすめに心ざすとて)という歌からもわかるように、粽を巻くことができる程度に葉が生長する。風に吹かれて音を立てる所以である。

「そよそよ」という表現については、「あきかぜに吹かれてなびくをぎの葉のそよそよさこそいふべかりけれ」(元良親王集・二〇・宮ことわりとて)、「ことわりやうらむることも秋かぜのそよそよをぎのはにぞおどろく」(古今六帖・第六・三七二〇・をぎ)というように、荻の葉が風に吹かれる音として詠まれることがあるが、感動詞「そよ」との掛詞として用いることが眼目であることは、当該歌と同じである。「そよそよ」とかたへしことはからころもかさねて人に見するなりけり」(為信集・一六〇・たのめて、はやこと人とねにける、あなあさましのころやと思ひながら)という歌も参考になろう。菰の葉について詠まれた歌は、今のところ管見に入らないが、当時の人々にとっては、聴覚的な実感を共有できる表現であったのであろう。

なお、「そよ」という表現ならば、「ひとりして物をおもへば秋のよいなばのそよといふ人のなき」(古今集・恋二・五八四・みつね・題しらず)の他、「をぎのはのそよとつげずはあきかぜを今日からふくとたれかいはまし」(躬恒集・七〇)、「秋風のいなばもそよに吹くなへにほに出でて人ぞ恋しかりける」(貫之集・五八一)など、感動詞「そよ」と掛けて用いられる例は、古今集時代から見受けられる。

「いかでと(ぞ) 思ふ」という句は、意が取りにくい。「ひさしきをねがふ身なればはるがすみたなびくまつをいかでとぞ思ふ」(古今六帖・第四・三二八四・いはひ、貫之集・二八二・春・初句「久しさを」・結句「いかでとぞみる」)、「みな人のいかでとおもふ万代のためしに君をいのるけふかな」(公忠集・二二・きたのみやの御もぎに)という歌も、文脈による意の補完が必要であろう。「まつ」や「万代のためし」では、なんとかして長寿にあやかりたいという意になるのであろうが、当該歌では、若孤を若い女性の比喩とすれば、恋人との逢瀬を願う男性の歌と見られよう。

三八一六(はなかつみ)

【本文】

きみがをる^(お)やへ山ぶきの花かつみかつみる人ぞこひしかりける

【校異】なし

【語釈】○やへ山ぶきの花かつみ 「やへ山ぶきの花」は、八重咲きの山吹の花。雄しべと雌しべが花弁に変化しているの、実はならない。多くの花弁が重なっている点と、果実が実らない点から、心を閉ざし、身持ちは堅そうであるが、本当は不実で浮気性であるという女性のイメージが重なる。ただし、和歌においては、不実であることは付带的で、心隔てをする存在として詠まれるのが一般的である。「花かつみ」を導く。また、「花かつみ」は「かつ見る」に付く枕詞。○かつみる 一方で別の人に逢う。また、ついちよつと逢う。

【通釈】

あなたが手折った(身持ちの堅そうな)八重山吹の花(女性)は、「花

かつみ」のその名のように、一方でついちよつと逢瀬をもった男性を恋しく思うことだ。

【他出】なし

【考察】

「やへ山ぶきの花」に喩えられる身持ちの堅そうな女性を我がものにした男性に対し、彼女は実は「花かつみ」で、別の男性をも恋慕しているのだと忠告した歌である。おそらく女性の歌であろう。

和歌表現においては、植物を手折るという行為は、男性が女性を我がものとする意を遇する。「きみがをるはなはいろにもみゆるかなつゆにころやおかるべらなる」(大式高遠集・七三・女)は、「きみ」(男性)が手折った「はな」(女性)は浮気性に見えると、別の女性から「きみ」に言い送った歌と見られ、当該歌と詠歌状況や内容に一脈通じるものがある。

また、「やへ山ぶき」は、「なにしおへばやへ山ぶきぞうかりけるへだててをれる君によそへて」(古今六帖・第五・二七六三・ものへだてたる)という歌からもわかるように、幾重にも心を閉ざして打ち解けず、身持ちの堅いイメージをもつ。これを、『齋宮女御集』の贈答歌、「やへながらあだにみゆればやまぶきのしたにぞなげくゐのかはづは」(六三・むまの内侍、やまぶきにさして)、「やへだにもあだにみえけるやまぶきのひとへごころをおもひこそやれ」(六四・おほんかへし)に見えるように、「やへ」だけでも「あだ」に見えると詠むのは、「語釈」にも述べたように、そもそも八重山吹は実を付けない(不実である)という植物の性質にも根差していよう。

「花かつみ」といえば、『古今集』恋歌四の巻頭歌、「みちのくのあさ

かのぬまの花かつみかつ見る人にこひやわたらむ」(六七七・よみ人しらず・題しらず)がまず念頭に浮かぶ。当該歌もこの古今集歌の影響下に詠まれていることは言うまでもない。「かつみる人」の用例も、「花かつみ」とともに詠まれた「花かつみかつ見る人のこころさへあさかのぬまになるぞわびしき」(信明集・一六・むらかみの御ときに、国国の名たかきところどころを御屏風の絵にかかせ給ひて／あさかの沼)の他、「花かつみ」を詠み込まない「こひのごとわりなきものはなかりけりかつみる人のかつはこひしき」(古今六帖・第五・二七一六・ふたりをり)という歌もあるが、先の古今集歌を踏まえたものと言えよう。

三八一八(あし)

【本文】

あしづののおひてしときにあめつちと人とのしなはさだまりにけり

【校異】 ○あしづの、―あしづの (松・羅・田) あしづの、(宮) ○しなは―しるは (宮)

【語釈】 ○あしづののおひてしとき 世界の初め。天地開闢。「あしづの」は、葦の若芽。先がとがっていて、角に似ているところからいう。葦牙あしかび。『日本書紀』には、「時に天地の中に一物生れり。状葦牙の如く、便ち神に化爲る。国常立尊と号す。」(神代 上)とある。○あめつち 天の神と地の神。天地の神。天神地祇。○しな 等級やその違い。差異。

【通釈】

葦角が生えた天地開闢の時に、天地の神と人との差異が決まったのであった。

【他出】

『和歌童蒙抄』 六二七番

(葦)

あしづののおひてしときにあめつちとひとびとのしなはさだまりにけり

『六華和歌集』 卷第七雑歌下、一六九八

六帖

葦角のおひ出でし時に天地と人とのしなはさだまりにけり

『六花集註』 雑下部、三六九番

葦角の生ひ出でし時に天地と人との品は定まりにけり

【考察】

『日本書紀』に見える創世神話を題材とした歌である。宮中における『日本書紀』の講読は、九世紀初めから十世紀半ばまで、六度にわたり行われたことが知られており、延喜六年(九〇六)の『日本紀竟宴和歌』においても、「四葦牙迺 那微能幾佐斯裳 度保迦羅須 阿麻都比津機能 波志米度母弊波」(上・四・從五位下守大学頭藤原朝臣春海・得くにとこたちのみこと 国常立尊・あめつちひらくるはじめ、うかびただよへるなかに、ひとつのものあり、かたちあしかびのごとくにして、かみとなれり、これをくにとこたちのみこととまうす、かみのよのはじめなり、あしかびは、あしのつのぐめるかたちなるべし)という、当該歌と同様の箇所に着目した歌が詠まれている。

また、『好忠集』所収〈好忠百首〉中の沓冠歌序文冒頭には、「これは、この雨のしたの、かみよより……」(四二〇)とあるが、承空本(冷泉家時雨亭叢書『承空本私家集 下』所収)に拠れば、当該箇所は「コレ

ハコノサトコタチノ神ヨ、リ……」になっており、国常立尊の名が記されていたと思しい。『古今六帖』成立時と目される十世紀後半においても、和歌作品に目立って現れることこそ少ないが、『日本書紀』の天地開闢神話に依拠した具体的な表現が垣間見える点に注意したい。

なお、天地開闢を「あしづの」という語を用いて詠んだ歌としては、後世の用例ではあるが、「あしづののおひ出でせめしそのかみに草葉みながら春を知りける」（久安百首・三八二・寂能・春廿首／若草）がある。

三八二一（あし）

【本文】

しらなみのよすればなびくあしのねのうき世のなかはみじかから
ん（つらゆき）

【校異】○あしのねの―芦邊には（和） ○下句―欠（和） ○みしか、・なん―みしかからなん（永・宮・田・黒・寛） みしか、らなん（松・羅） 短からなん（林）

【語釈】○しらなみ 立ち砕ける白い波。 ○あしのねの 葦の根が泥土（うき）の中にあるところから、「憂き」にかかる枕詞。また、ここま
でが序詞。葦は水辺に群生し、地下茎が地中を長く這う（「考察」参照）。
○うき世のなか つらい世の中。「うき」は「憂き」と「泥土」とを掛ける。 ○みじかからなん 短くあつてほしい。葦の根が短ければよいという意に、つらい世の中が短期間であつてほしいという願望を重ねる。

【通釈】

白波が寄せると靡く、泥土の中の（長い）葦の根が、短くあつてほしいのと同様に、苦しみに満ちたこの世に生きるのは、短期間で

あつてほしい（つらいこの世には、長く生きていたくはない）。

【他出】

『続後撰和歌集』卷第十八雑歌下、一二二七番
（題しらず）

よみ人しらず

しらなみのよすればなびくあしのねのうき世中はみるがかなしさ

【考察】

葦の根が、波の打ち寄せるたびに、泥の中で当て所なくなびく情景に、「泥土」と「憂き」との掛詞により、つらい思いを抱えて周囲に翻弄されながら生きる人生を重ね、いっそのことこの世に生きる時間が短ければよいと嘆いた歌である。「白波」と「泥土」には、色彩の対比も看取されよう。

打ち寄せる白波に身を任せるさまは、「しらなみのよすればよするさざれ石のかどなきものはわが身なりけり」（長能集・二六・うちわたりなりし人に）にも相通じるものがある。

なお、「あしのねのながきをよするしらなみはたづのは風のなごりなるべし」（尊経閣本元輔集・四八・このをしきに、ないしのかみにつかはしたるかへりごとを、かはりてよみはべりける、つゑ）からは、長い葦の根を白波が洗う情景が読み取れる。当該歌の結句「みじかからなん」には、根の長さについて言う意も込められていると見た。さらに「あらいその浪にやつるるあしのねのかくれあらはれたれかたづねし」（惟規集・一三）からは、波が打ち寄せるままに見え隠れする葦の根の様子がわかる。

「あしのね」が「うき」の中にあることは、「うきにおふるあしのねにのみなかれつついきて世にふるここちこそせね」（九条右大臣集・

一三・このころかはりたりとみて、(衛門) という歌からも端的に知られる。

「あしのねの」「うき」と続く例は、勅撰集においては、「あしのねのうきみのほどとしりぬればうらみぬそでもなみはたちけり」(後拾遺集・恋三・七七一・公円法師母・中納言定頼がもにつかはしける) が初出であり、八代集では唯一の歌と見られる。当該歌と同時代の例は管見に入らないが、後世の歌ならば、「あしのねのうきみながらの橋柱かくて朽ちなむ名こそ惜しけれ」(建保名所百首・一〇八四・家衡卿・雑二十首／長柄橋 同国〈撰津国〉)がある。いずれも「うきみ」に続き、当該歌と同じ「うきよ」の例は、今のところ見当たらない。

三八二五(ひし)

【本文】

あすへては心ほそみのいけにおふるひしのしたねのながれこそすれ

【校異】 ○あすへては―あすへてや (和・宮)

【語釈】 ○あすへては「ては」は、仮定の意を表す。 ○心ほそみのい

け「心ほそし」に地名「ほそみの池」を掛ける。 ○ひし ヒシ科の

水生一年草。池や沼に生え、種子は食用になる。 ○したね 根の下の

方の隠れて見えない部分。「根」と「音」との掛詞。 ○ながれこそす

れ「流れ」と「泣かれ」との掛詞。

【通釈】

明日を過ぎしたら、心細いことに、「ほそみ」の池に生える菱の下根が流れる(声を立てて自然に泣く)ことだ。

【他出】

『夫木和歌抄』 卷第二十三雑部五、一〇七五五番

ほそみの池、国未勘

題しらず、六帖

読人不知

あすといへば心ほそみの池におふる菱のしたねのながれこそすれ
『歌枕名寄』 未勘国下、九五九四番

細見池

あすといへば心ほそみの池におふるひしのうきぬのながれこそすれ
【考察】

「(心)細み」という名をもつ池の底に、か細い根を下ろす菱が、弱々しく水の流りに浮かんでいる。流されずにいるのは、せいぜい明日までだろうと思われるその情景に、「(下)根」と「(下)音」、「流れ」と「泣かれ」というふたつの掛詞によって、恋人の自分への思いが信頼できず、心細く不安で、明日まではなんとか耐えられても、その後には忍び泣きをしてしまいそうだという、切ない心情を重ねた歌である。

「したね」の用例を検すると、「かくれぬにおひそめにけりあやめ草しる人なしにふかきしたねを」(蜻蛉日記・下・一九四・作者)、「たづのすむさはべのあしのしたねとけみぎはもえいづる春はきにけり」(能宣集・一一六・小野宮の賀おこなひたまふ屏風のれうの、春)、「かくれぬのこほりのまよりしたねさしあしのふるばもいまやとくらむ」(書陵部本能宣集・五七・おなじやうなること(うたあはせ……筆者注) 人のしはべりけるに、はつはる)、「あきの野のをぎのしたねになくむしのしのびかねてはいろにいでぬべし」(斎宮女御集・二八・又、女御、かぎりなりける)といった、菖蒲草や葦、荻の歌は見出せるが、当該歌のように菱を詠んでいるものは見当たらない。当該歌の菱の下根は、人目につかないというイメージの他に、「(心)細み」という池の名とあわせて、

か細さ、弱々しさを鮮明に表現していよう。なお、当該歌を念頭に置いた後世の作として、「いかにせむ人しれぬまのみこもりにひしのしたねのたえぬなげきを」(新撰六帖・第六・二〇三三・知家・ひし)という歌がある。

「したね」と「なか(れ)」との組み合わせは、「人しれず物思ふ時はなにはなるあしの下ねぞしたになかるる」(新千載集・恋一・一一三四・貫之・題しらず)の他、「みのほどもおもひしらるるあやめぐさ人のうきにはしたねなかれて」(肥後集・六五・おなじ人、さうぶにかきて)、「なにはがたあしのしたねにながれつつしげれるこひをしる人ぞなき」(前斎院撰津集・四四・恋)といった歌に見出される。また、「ね」(根・音)と「なか(れ)」(流れ・泣かれ)を詠み込んだ例も、「うきにおふるあしのねにのみななれつついきて世にふるこちこそせね」(九条右大臣集・一三・こころかはりたりとみて、衛門)、「よどわたり雨にはいとどまこもぐさまことにそれをねになかれにし」(和泉式部集・五〇九・人のかへりごと)などがある。いずれも用例数はそれほど多くはないが、表現としては定着していた感がある。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学部における二〇一四年度春学期の授業「文献講読」の内容の一部であり、また、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」(同志社大学人文科学研究所第18期研究会(京都と文化)第17研究会、および科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号25330403、いずれも平成

二十五〜二十七年)における研究の一部である。

三八〇九・三八一一・三八一三番歌を福田が執筆し、その他は、「文献講読」受講生、上田果穂(三八〇九番)、松井佑磨(三八一〇番)、濱元佐和(三八一四番)、梅山菜帆(三八一六番)、原あや乃(三八一八番)、野口智史(三八二一番)、近藤祐輔(三八二五番)のレポートをもとに、福田が全体にわたる加筆修正をおこなった。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器“eCSA Ver.200”を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・鳥原図書館鳥原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

〈附録〉

『古今和歌六帖』別出歌一覽―第六帖(7) 菰く菱―

凡例

1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・左注がある場合は、当該歌のあとに()を付して記す。

2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六帖』の成立は十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品まで調査範囲を設定している。

第一巻 1古今和歌集く4後拾遺和歌集

第二卷 1万葉集 6和漢朗詠集

第三卷 1人丸集 81赤染衛門集

第五卷 1民部卿家歌合 61源大納言家歌合 長久二年、253紀師匠曲水宴

和歌 269九品和歌、281歌經標式(真本) 285新撰髓腦 290新撰和

歌髓腦、347古事記 353風土記、371日本靈異記、372三宝絵、389土

左日記 393和泉式部日記、414竹取物語 420落窪物語

第六卷 2秋萩集 5麗花集

第七卷 1奈良帝御集 36肥後集

3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数・通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

〈例〉3-19貫之355 『新編国歌大観』第三卷19番目の『貫之集』355番歌

4、別出本文に異なる場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異なるみに限る。

5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまな類似性を有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいものの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、△参考▽と記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として△未詳▽と記し、傍線を付す。

別出歌一覧

こも

3807 わぎもこにこひつつあらずはかりこものおもひみだれてしぬべきものを

2-1万葉 2775

3808 はるごまのあさるさはべのまこもぐさまことにわれをおもふやはきみ

〈未詳〉

3809 わがきみが おゆるがをしきさだのいけのこもにもかもやかりあげはやさん

〈未詳〉

3810 こもまくら たかせのよどにかるこものかるともわれはしらでたのまん

〈未詳〉

3811 わぎもこに かけてないひそかりこものみだれておもふ君があたりぞ

3812 (おほとものかたみ) 2-1万葉700 「わがききに」 「きみがただかぞ」

こまちかふさはのわかごも かりにきていかでよどのの ことをしりけん

(つらゆき)

〈未詳〉

3813 みくまのの かるやみこものあみかけて ゆふてにおもふ我ならなくに

〈未詳〉

3814 さつきまつぬまにおひたる わかごものそよそわれもいかでぞ思ふ

〈未詳〉

はなかつみ

3815 をみなへし さくさはにおふる 花かつみみやこもしらぬこひもするかな

2-1万葉678 「さきさはにおふる」 「かつてもしらぬ」 「こひもするかも」

きみがをるやへ山ぶきの花かつみかつみる人ぞこひしかりける

〈未詳〉

3817 みちのくのあさかのぬまの花かつみかつみる人のこひしきやなぞ

1-1古今677 「かつ見る人に」 「こひやわたらむ」、2-3新撰和228 「か

つ見る人を」 「こひやわたらん」

3818 あしづののおひてしときにあめつちと人とのしなはさだまりにけり
〈未詳〉

あし

3819 つのくにのなにはあしのめもはるにしげき我が恋人しるらめや

〈つらゆき〉

1-1 古今 604、3-19 貫之 554

人しれずものおもふときはなにはなるあしのしらねのしらねやはする

7-5 躬恒 354 「あしのしじねの」「しじねやはする」、3-19 貫之 552 「蘆

のそらねも」「せられやはする」

3821 しらなみのよすればなびくあしのねのうき世のなかはみじかからなん

〈つらゆき〉

〈未詳〉

3822 おしてるやなにはほりえのあしべにはかりぞねたらしものふれるに

2-1 万葉 2139 「おしてる」「かりねたるかも」「しものふらくに」

なにはめのころもほすとてかりてたくあしびのけぶりたたぬ日ぞなき

〈つらゆき〉

3-19 貫之 159

ひし

3824 きみがためうきぬのいけにひしとるとわがそめ袖のぬれにけるかも

〈人丸〉

2-1 万葉 1253 「うきぬのいけの」「ひしつむと」「わがそめしそで」

あすへては心ほそみのいけにおふるひしのしたねのながれこそすれ

〈未詳〉

3826 とよくにのきくのいけなるひしのうれをとるとやいもがみそでぬるらん

2-1 万葉 3898 「つむとやいもが」「みそでぬれけむ」